

書 評

島田千秋・青木孝子 著

『現代経済学要論』

本書は、明治大学名誉教授島田千秋、萩国際大学専任講師青木孝子の両氏によって著された経済学の入門書である。入門書といっても、著者の「はしがき」の「…、本書はこれから経済学を学ぼうとする人たちに、経済学の基礎理論をできるだけわかり易く解説することを意図した。そのため、今日広く承認され、確立された現代経済学の諸概念と理論をとりあげ、体系的に修得できるように構成し、記述することに努めた。」という記述からも窺い知ることができるように、現代の経済社会を理解するために教養としての経済知識を身につけようとしている人の入門書ではなく、むしろ経済学を多少なりとも深く学ぼうとしている人たちのための経済理論への入門書であるといえよう。とはいっても、前者には無用のものであるといっているのではない。教養として経済の知識を身につけようとしている人々にも十分に役立つ内容をもつものであることはいままでもない。

本書は、イントロダクションとなる章を含めて、全体で11の章から成り立っている。執筆分担は、第1章から第6章までを島田氏が、第7章から第11章までを青木氏が、それぞれ担当している。

第1章で、まず、我々のもつ無限ともいえる欲望を、稀少な資源をもって満たしていかなければならないところから発生する経済社会の直面する問題を、つぎの6つにまとめる。第1は、どのような財・サービスをどれだけ生産するか。第2は、どのような方法で財・サービスを生産するか。第3は、生産された財・サービスを人びとの間にどのように分配するか。第4は、資源は完全に利用されているか、それとも資源の一部が遊休状態におかれているか。第5は、貨幣の購買力は一定であるか、それともインフレーションのために低下していないか。そして第6は、経済の生産能力は時間を通じて増大しているか、それとも不変であるか、という6つの問題がある。

これら基本的な経済の諸問題が、資本主義市場経済のもとでどのように解決されているかを、マクロとミクロの分析手法をもって解明していくことを本書の基本テーマとして掲げ、以下に続く諸章もそうした基本テーマに則して構成されている。

第2章から第6章までは、マクロ分析の理論が取扱われており、主に上記の第4と第6の問題が、我々がその中で生活している資本主義市場経済のもとで、いかに解決されているか、

はたして望ましい解決をみることができるのかが、マクロ分析の理論をもって解明されている。第7章から第11章までは、主に第1と第2の問題が、市場機構のもので、いかに解決されているかが、ミクロ分析の理論をもって解明されており、全体的にみて、本書は極めて体系的に整った構成となっているといえよう。

ところで、こうした「入門書」を評価するさいの基準として、筆者はつぎの4つを考えている。第1は、入門書として取挙げるべき基本的な概念。理論を適切に取入れているか。第2は、記述が平易であるか。第3は、理論を解説するにあたって現実の経済社会と理論との係り合いを十分に意識しているか。そして第4は、書物自体コンサイスであるか否か、である。

これら4つの基準のうち、第4の基準は上記の3つの基準と矛盾するものであるかもしれない。上記の3つの基準をクリアーするような書物であれば、それはかなりの大部のものとならざるを得ないからである。しかし、あまりにボリュームのあるものは、初学者にとって親切な入門書とは言えない側面もある。というのも、読了するのにかなりの労力と時間を費やしてしまうからである。かつて洛陽の紙価を高めたサムエルソンの『経済学』の邦訳は上・下2巻でおおよそ1000頁、また最近売り出しのスティグリッツの『経済学』に至っては、その邦訳は3巻でおおよそ2000頁あり、経済学の学習を専門に志す経済学部の学生でも、これだけ大部の入門書を読了しうるものは少ないのではないかと、言われている。

本書を上記の4つの評価基準で評価してみると、入門書として取挙げるべき基本概念と理論は適切に取入れているといえるし、記述は平易であり、コンサイスにまとめられており、これら基準をほぼクリアーしているといえよう。欲を言えば、ミクロ分析の理論は抽象性が高く、初学者にはとかく敬遠されがちであるため、理論を解説するにあたって、いまし現実経済との関連を全面に出した記述であることが望ましいといえよう。しかしこの点は、紙幅の関係で不十分にならざるをえなかったのであろうと推測している。

さらに加えて今後補うべき点として、つぎのことを指摘しておきたい。まず第1に、第1章で挙げた6つの基本的な経済問題のうち、第3の分配の問題と第5のインフレーションの問題が明示的に取扱われていないので、これらの問題の分析を付け加えるべきであるということである。これらの問題の分析が取扱われることになれば、本書は、国際経済を除いて、経済理論のほぼすべての分野をカバーすることになるであろう。さらに、ミクロ分析の理論で最近取挙げられることの多い情報や不確実性に関するトピックスも取入れていけば、内容はさらに充実してくると言えよう。以上の諸点も書物をコンサイスにするというところから割愛せざるをえなかったと思う。後日改訂のさいに、これら諸点を増補していただければ、本書はより内容の濃い入門書となるであろう。著者に期待したいところである。

(明治大学教授 里見常吉) 【白桃書房 2000年 viii+187頁】